

4. *missilia*と*nipponica*とを同一としたが之れを form, 若しくは race にするかは明記してない。私は此の二つを *clara* の異名とした。*nipponica* の産地が沖縄とレーベル付けられて居るとのことは私の想像が間違ひでなかつたことを知つた。

圖版 VIII の説明

- 1 *Hestia leuconöe clara*. 石垣島七月、*clara* と *riukiensis* の中間に近いもの。(三分ノ二縮小)
- 2 *H. leuconöe clara*. 沖縄島首里二月。(三分ノ二縮小)
- 3 *H. leuconöe clara form riukiensis*. 沖縄島運天三月。(三分ノ二縮小)
- 4 *H. leuconöe clara form riukiensis*. 紅頭嶼三四月、*clara* と *riukiensis* の中間のものでより多く *riukiensis* に近いもの。(三分ノ二縮小)
- 5 *H. leuconöe clara BUTLER* 恒春十一月。(三分ノ二縮小)
- 6 *H. leuconöe clara form kwashotoensis new form* 火燒島七月。(三分ノ二縮小)

雜 錄

珍しい臺灣産テナガコガネ *Propomacrus macleayi*
HOPE に就いて

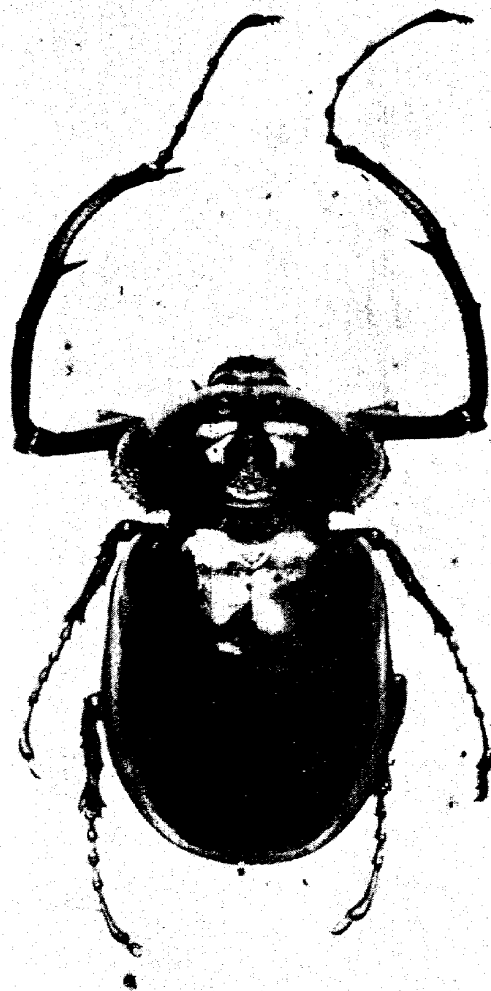
横 山 桐 郎

私は昨年五月日本の熱帯國と言はれる臺灣へ採集旅行を行ひ、多くの昆蟲類を集め歸つたが、その中でも最も私の興味を惹いたのは、表題に掲げた「テナガコガネ」といふ體長 60 mm に及ぶコガネムシの一種であつた、此蟲は、Scarabaeidae (コガネムシ科) の Euchirinae (テナガコガネ亞科) に屬するもので、此亞科に屬する種類は、目下世界で十一種ばかり知れてゐるが、其中二種は、印度及びその附近から更に二種、南支那から二種、フィリッピンから一種、マレイ群島のシーラム、及びアムボイナ兩島から一種、最後に小亞細亞を初めとして南方コンスタンチノーブル附近へかけて一種、都合十一種が知られてゐるといふわけである、然し其産地は凡て東洋諸國に限られてゐる、そして此類のものが、吾が臺灣に居るといふ事は、臺灣の昆蟲學者間には周知の事であり、又遠くは 1913 年獨の OHAUS 博士は、臺灣で朽ちた樟樹の樹の幹から此蟲を掘り出したといふ記録もあるが、本邦人の手に依つては未だ一度も記録された事がない故、茲に寫真と共に記して諸君に御紹介しやうと思ふ。

形態、先づ其形態から記せば、概形は濃い赤銅色若しくは金綠色の光澤がある如何にもどつしりした形で、頭部は小さいが前胸背は大きく、翅鞘は小判形を

呈し、地色は先づ黒色だが、光線の具合で、緑紫色の金属光澤を放ち、表面には不規則形の黄橙色の斑點が散在してゐる、そして體の下面には淡黄褐色の長い軟毛が一面に生へてゐる、但し腹部の中央部殊に第五節には毛が少ない、此毛のふかい事は雄に於いて一層甚だしく、雌に於ては腹部の兩側に少し生へてゐる丈で、中央部には殆んどない。

雄、さて更に雄雌に就いて細述すれば、雄は頭部は體の割合に小さく、粗大な點刻密布し、顎片は顯著な隆起線に依つて前頭と隔離され、顎片の前面は^{エグ}刳れたやうに凹み、前縁は著しく上方に跳ね返へり、その前縁の中央部は、稍、圓く灣出してゐると共に、兩端は小さな刺となつて突出してゐる。前胸背は極めて横廣であり、又背面隆まり其中央には深い縦溝が通つてゐるが、此縦溝は中央部以後から漸時巾を増し、略、三角形の凹陷を形造つてゐる。前胸背の稍、前方に扁して、此縦溝の左右に、一對の淺い圓形の凹陷部がある、之は雌よりも雄の方が著しいらしい。前胸背の全面には圓形の顯著な點が散在してゐるが、前胸背の周圍及び縦溝の中には特に多く、寧ろ密布してゐると云つてよい。前胸背の兩側は弧狀に突出し此部分は扁平を呈してゐる。周邊には細かい齒狀突起が並び、下面には淡黄褐毛を、又下面周邊には濃い黄褐毛が密生してゐる。翅鞘は既に形態の所で記した通り。稜狀部は半月形で稍、光澤を放ち、微細な點刻があるため粗面を呈してゐる、脚は黒色であるが、腿節下面は金緑光を帯びて



テナゴコガネ ♂ 實物大より五分縮小
(著者寫眞)

ゐる。前脚は著しく長く、腿節の(20 mm)の前方の中央から稍、基部に近い所には長三角形の大きな突起がある(之は雌にない)。脛節は著しく細長で腿節の約二倍(約40 mm)、弓なりに内方に曲り、上面一帶には細かい刺狀突起を生じ、外側に沿ふて三個の小突起及び内側の中央から少し前方に扁した所から、著明な

角状の突起を出し、此突起は斜に上方に向つてゐる。脛節の先端は刺状に尖つてゐる。跗節は細く第一節は短かいが、第二、第三、第四と漸次少しづゝ長さを増し、第五節目は極めて長く(10 mm)、第三、第四の和に略等しい(全長32 mm)。先端には二又に分れた爪をもつてゐる。中、後兩脚は略同形で、各腿節には太い刺をもつてゐる。尾節には淡黄褐の軟毛密生してゐる。體長62 mm。

雌、雌は雄に比べると遙かに小さく體も細形で又前脚は普通であるから何等著しい外観は呈してゐない。そして尙雄と異なる點は前胸背の點刻が雄よりも

つと著しい事、翅鞘の斑紋が明瞭でない事、體の下面及び尾節に毛の少ない事、前脚の脛節の外側には六本の太い刺を有する事、後脚の脛節先端がラッパ状に擴大してゐる事などである。體長55 mm。



テナゴコガネ ♀ 實物大より約七分縮小
(著者寫眞)

- 習性、既に述べた通りテナゴコガネの類は世界で既に十一種も知れてゐるけれど、その習性、生活史などに至つては未だ全く未知の状態に在るやうである。たゞ幼蟲は鋏形蟲の類と同じやうに植物の朽洞内に棲んでゐて腐蝕質を食して生活してゐる事。そして成蟲は各種の樹の幹から浸み出す甘液を吸つてゐる事などが判つてゐるに過ぎない。然し想ふに此蟲は體格が如何にも魁偉であるだけに、その行動は鈍く、従つて其生活にしても、平穩且つ平凡であるに

相違あるまい。然しその偉大な體格の行動を援けるため、屈強な脚を持ち、その先端に有する鋭い二又に分れた爪を備へてゐる事は興味ある點である。彼は此強い脚と、爪との力に依つて、充分體重を支へ、高い樹にも登攀する事が出来る。尙此甲蟲の一大特徴ともいふべき雄の前脚の發達は、一體何を意味するかといふに、それも判つきり説明がついてゐない。尤も此現象は、コガネムシ科の中でも、ハナムグリ亞科(Cetoninae)や、カブトムシ亞科(Dynastinae)の類でも幾分その傾向は見られるが、此テナゴコガネ亞科(Euchirinae)程著しい事はない。英のARROW氏に依ると、印度やマレイ産のものでは、前脚が樹の枯枝に似てゐるけれど、又他の或種では、脛節に金色の密毛を裝ふてゐて少し

も擬態の役をしてゐない故、擬態説も、此現象の説明としては適當でないし、又脚の變形が元來生物としての有用生命が雌よりも短かく従つて、種の存續のためには、保護が少なくてもよい雄の方に限つてゐるといふ事は、此問題の解決として一層困難にしてゐると言つてゐる。

學名の變遷、本種の學名は最初は 1841 年 HOPE 氏によつて *Cheirotonus macleayi* として發表されたので (Ann. Nat. Hist. VI p. 300 及び, Trans. Linn. Soc. XVIII 1541) その後暫らくは上記の學名が用ひられてゐたが、1848 年に WESTWOOD 氏はこれを *Euchirus macleayi* (Cabinet of Oriental Entomology p. 3) としたが、1874 年に至つて DEYR 氏は更らに屬名を改め *Propomacrus macleayi* (Ann. Soc. Ent. France, (5) IV) とした、そして現今では此學名が用ひられてゐる。

本邦での採集の歴史、吾が國では臺灣に産する丈で、それも極めて稀で臺中州能高郡霧社からハボン邊りで採れるので、從來採れた類は、先づ多くて二十匹内外であらう。多くは夜間燈火採集によつて採れるそうであるが、又朽木の下などで採れる事もあるといふ。私の所持品の雄は昨夏、臺灣、埔里街の朝倉喜代松氏から贈られたもので、ハボンの産。雌は知友鹿野忠雄君の採品である。詳しい採集歴史に就いては今私はよく知らないが、兎に角珍しい甲蟲である事は確かである。

抄 録

Triton taeniatus の半側胚の癒着に依る髓板の誘起形成に就いて

HANS WEBER: Arch. f. Entwicklungsmech. d. Organismen. Bd. 113. Heft 4. p. 669-703. p. 1928.

Triton 囊胚を相稱面に於いて左右兩半に切斷し、各同側の半胚を極を一致せしめて癒着する。然かる時は VOGT の胚の豫定域分布圖に依つても推察し得る如く各半胚の髓板豫定域と腹面の外皮豫定域とは癒着面に於いて相隣接せる位置を取る。斯の如き癒着胚は後各側の半分の胚原基が他の半胚の外皮豫定域を髓板に誘起せしめる事に依つて、完全な二個の相對せる胚原基(髓板、脊索及び中胚葉側板)を形成する。此の事實は且て SPEMANN に依つて 1918 年に發表されたが、但し氏の研究に使用せし胚は相互同色なりしたために、此の實驗を説明するに最も必要なる兩半胚の各域の行動は明白に認知し得なかつた。本實驗は特に此の點の是正を欲する見地よりなされ、先づ癒着前に豫め一方の胚を